

## 実践報告

# 「聖地」での合奏を目指して ～北宇治高校 OB 吹奏楽団の取り組み

山 崎 晶・い る か

### はじめに

宇治市の高校吹奏楽部を舞台にしたアニメ『響け! ユーフォニアム』(京都アニメーション)は、2015年の放送開始以来続編が作られている人気シリーズである。緻密に描かれた宇治市内の風景を体験しようと、今もファンが「ものがたり」観光(いわゆる「聖地巡礼」)で訪れている。その中には、作中で登場人物たちが演奏している楽曲を「聖地」で演奏したいというファンもいる。北宇治高校 OB 吹奏楽団(以下、北宇治 OB)は、そうしたファンによって結成され、今年で8年目を迎える。アニメやゲームの音楽を演奏することを目的に集まる楽団や合唱団(いっばんに「サブカル楽団」と言われる)は少なくない。しかし、北宇治 OB は『響け! ユーフォニアム』で演奏される曲を中心に演奏活動をしているという点において特徴的な楽団である。同楽団がコロナによって練習の中止や演奏会の延期を余儀なくされながらも、活動を続けてこられたのはなぜなのか。

このような問題意識に基づき、2023年7月16日(土)京都文教大学にて、楽団の代表者であるいるか氏、また楽団結成当時を良く知る夷氏(『響け! ユーフォニアム』研究者)、京都文教大学の片山明久氏を交えて結成の経緯や、組織の運営や維持について伺った。

### 結成について

山崎: 北宇治高校<sup>1)</sup> OB 吹奏楽団は、2016年の結成でしたっけ?

いるか: そうですね。発足が2016年の2月。なんだかんだで、8年目。

山崎: コロナを挟んでの8年って、すごく価値ある8年だなと思います。結成はいるかさんが呼びかけられたんですか。

いるか: そうですね。

山崎: Twitter(現「X」。以下、Twitterと表記)とかで知りあった『ユーフォ(『響け! ユーフォニアム』の略称。以下同様に表記)]が好きな人たちとコミュニケーションをしているうちに、じゃあ、ちょっと吹いてみようぜ、みたいになったとか。

いるか: 両方かな? 2015年にアニメが放映開始になって、その当時から楽器を片手に宇治にやってくるっていう人たちが、ちらほらいたわけなんですけども。で、まあ、せっかくだっていうことで、小規模なセッションが、それこそ、「響け PJ<sup>2)</sup>」とかのイベントとかでおこなわれたりして。どうせなら、大人数でできたらいいよねっていうのがあって。でも難しいよね。どうしようか、みたいな感じだったところで、いっぺんやってみましょって言い出したのが僕。

山崎: なるほど。いるかさんご自身は吹奏楽の経験がおりなんですか。

いるか：吹奏楽そのものはないですね。

山崎：(ロック)バンドはいかがですか。

いるか：バンドは、高校生時代、高校とか大学でちょこちょこっとやってたような感じですね。

山崎：なるほど。でも、いわゆる吹奏楽ができるほどの人数を、まとめていくってすごいことですよね。規模がそもそも。

いるか：まあ、まあ、そうですね。

山崎：呼びかけ人っていうことですが、どういうかたちで、最初メンバーを募られたんですか。

いるか：最初は、チラシと、ホームページも最初あったのかな。あとはTwitterで、楽団のアカウントがいつできたのかも、もう覚えてないんですけど(実際には2015年12月作成)。Webと、あとはなんだろう?サブカル吹奏楽<sup>3)</sup>っていう界隈はもうあったので。

山崎：ありますね。

いるか：結局その横のつながりで、クチコミで「やらない?」って誘われた人たちみたいな。

山崎：なるほど。

片山：準備会が15年の11月か、12月ぐらいに、すでに。

いるか：さっきの、いっぺんやりましようっていう集まりがそれですね。「サイゼの会」ですよ。

片山：そのときに、すでにもう10人ぐらいはいらっしまったんですかね。

山崎：ああ。

片山：そういう、いろんな楽団に、所属してはるわけで。

山崎：ちなみに、チラシって、どういうところに置いておられたんですか。

いるか：どういうところ?

山崎：例えばコミケで、誰かのスペースに置かせてもらったとか、楽器屋さんにも置かせても

らったんだとか。

いるか：一番最初のチラシは、楽器屋さんとか、それこそ宇治近隣、宇治とその近隣の公民館とか、コミュニティーセンターみたいなところに、置かしてもらったりとかして。存在をアピールするとか。

山崎：地域にも、こういうのあるよっていうかたちで。

いるか：置いたと思います。

片山：うちの大学にも置きました。

山崎：そうですね。サブカル吹奏楽団もあるけど、サブカルオーケストラもあって、サブカル合唱団もありますね。その中でも『響け!』(に関する曲)をやりますよというこの楽団は、メンバーの募集のしかたが、いわゆる市民楽団のような集まりとはちょっと違うなっていう印象を持ってたものですから。コミュニティーセンター(のように不特定多数の人がアクセスするところ)にチラシを置いていたっていうのがすごく感慨深いなと思って。

いるか：そうですね。最初から宇治っていう、ほかのサブカル吹奏楽団と比べて、地域性が濃いので、奏者じゃない人にも存在を知ってもらおう、みたいな思いがたしかあったと思いますね。

山崎：なるほど。そうですね。北宇治高校って言ってますからね。

いるか：そうです。練習場所の予約とかの時に、「え?北宇治高校なんてありましたっけ?」みたいな反応があっ。「あの一、かくかくしかじかだね」って説明して、「あ、はあ」みたいな。で、活動を長く続けていくなかでだんだん「ああ、あのユーフォのね」みたいな反応になっていくんですけど。そんなアニメやってるんや、みたいな。

片山：リアル高校生もね、最初の年から、1人來はりましたもんね。

いるか：そうですね。

山崎：10人ぐらいの方と、最初集まったって、おっしゃってましたけど、この10人の方って、今もメンバーとして関わっておられる方たくさんいらっしゃるんですか。

いるか：ほぼいますね。

山崎：はい。この人たちは、偏りなくパートをお持ちだったんですか。

いるか：わりとばらけてましたね。

山崎：じゃあ、アンサンブルができる感じ。

いるか：というと、また、けっこう違うような組み合わせだったりしたんですけど。まあ、このときの10人には、それぞれ片山先生とか全然楽器やらないけど、『ユーフォ』ファンですみたいな人とかもちょっといたんです。最初の合奏が、2016年の3月なんですね。それも演奏者は、10人ぐらいだったんですけど。そのときはパートもばらばらで。ひと言で言えば人数が足りない。作りたい音楽に対して楽器が足りない。こんなもんか、最初は、みたいなことをみんな感じながらやってたとは思うんですけど。

山崎：じゃ、このときも、10人ちょっとぐらいですか。最初にみんなでやりましょうという時は。

いるか：そうですね。

山崎：人数が10人ぐらいで最初セッションやってみて。音少ないよね、とかいう話になりながら。自分たちが求める音がそろってくるのって、いつごろでしたか。

いるか：うーん、人数だけで言ったら、最初のファンコンサート（2016年12月）がだいたい50人ぐらいでやったので、そのときには人の数自体はそろってますね。

片山：けっこう早かったですね。そっからは。私覚えてますけど、夏に練習にちょっと。

夷：練習見学しに行った時に。

片山：見に行ったときに、もうすでに40人ぐらいはいたはったし。

いるか：そうなんです。

片山：だから3月から8月ぐらいまでのあいだに、とんと集まったっていうかんじじゃないですか。

いるか：やっぱり当時アニメの2期放映中だったんで。

片山：その辺で、わりとすーっと集まってきたというか。すごいなと思った覚えがありますよ。

いるか：ほかのサブカル楽団にも入ってる人が、こんなにスムーズに集まるのうらやましい、みたいなことを言っていたりとか。

片山：作品がね、応援してますから。

いるか：作品そのものの人気も高いってところで、大きいかな。

夷：けっこう兼任でやってる人もいますよね。

いるか：やっぱりいますよ。午前中よその団体行って、午後、北宇治の練習参加して、じゃあ、夜また別のところ行くみたいなね。明日関東で練習あるんで、練習終わったら夜行バス乗りますとか。

片山：いるかさんもおっしゃると思うんですけど。遠方が多いんですよ。

山崎：遠方が多い。

夷：うん。

いるか：けっこうここがね。それこそコンテンツリズムな話になるのかもしれないですけど。「あの『ユーフォ』の曲を、宇治で合奏できる！」ってなると、たぶんそれが魅力になって。さっきのどの辺から来てるって話なんですけど、一番は京都、大阪、滋賀。

いるか：まあ、数で言うと、次いで愛知辺りの東海エリア、関東の東京、埼玉辺りの関東エリアかな。で、ちらほらと、その、仙台とか、金沢とか。信州の人もいたし。あんまり西は広が

らないんですけど。

片山：そうですね。東が多いね。

夷：西が全然広がらない。なぜでしょうね。

いるか：所属してて、仕事で九州に行っちゃった人とかはいるんですけど。あとは、なんだかんだって言って、東京、大阪のあいだのアクセスがよいていうのもあるのかもしれないですね。

夷：また逆に、西でも参加したい人はいるけども、交通事情とかを考えて、断念してる人もいるかもしれないですよ。

いるか：地味に東京から宇治に来る交通費よりも、福岡から宇治に来る交通費のほうがちょっとやっぱり高いかもしんない。

山崎：四国辺りから来る人がいても、おかしくなさそうなのに、意外とないんですね。ちなみに、演奏会をここ（宇治）でやろう。だから練習しようという感じですか。

いるか：そうですね。（尼崎の）アルカイックとか、京都コンサートホールとか、そういう作中に出てくるほかの会場も、話だけは挙がるんですけど。やっぱり、宇治文（宇治市文化センター）だよな、みたいな。作品に関係ないところでやるっていうのは当初から考えてなくて。1回だけ（大阪府）茨木市の竹灯籠っていうイベントに出さしてもらったことがあるんですけど。

片山：（北宇治高校 OB 吹奏楽団の演奏会の）1回目は、小ホールやったんですね。

夷：1回目小ホールでしたっけ？

いるか：1回目だけ小ホールで。まあお金のことと、あとは、果たしてどれくらい行けるのか、みたいなんがあつて。で、小ホールでやりましようと言うて。

夷：あ、そうだ、人が溢れたんだ。思い出した。

片山：とんでもない目に遭ったんです。私が、消防法上、これ以上絶対に入れられないという、

限界まで（来場者を）入れて。それでも、結局20人ほどお断りしたんです。

山崎：そうですね。2017年には、私、たぶんね、最初の「響け」の（キャラクターの）誕生会のときに、（楽団が）出演されたのが初めてです。大学の同唱館で。

いるか：あの、ごあいさつだけはした覚えがずっとあつて。

山崎：でしたっけ？あるときには、吹奏楽としての音ができつつあつて、人数はそんなに多くないけれどもという印象を受けた記憶があります。けっこう、大人の人たちですよ。集まっておられるのもね。

いるか：基本的にその、若いって言っても20代で働いてる人とかが多いです。学生のほうが圧倒的に少ないですよ。毎年大学生も、10人もいないぐらいなんで。高校生はほんと1人いるかどうかというね。そんなこんなで、宇治（を舞台にした）『ユーフォ』という作品ありきなので、宇治、京都以外では、そんなに活動に重きを置いてない。あの、練習場所はちょっと例外があるんですけど。で、あとは、サウンドの話をする、人数がっていうよりは、やっぱり音色とか、楽団の方向性とかで、せっかくならちゃんとした演奏にしていきたい。だけど、演奏スキルで（メンバーを）足切りをしているわけではないので。そこはたぶん、うちの指揮者や昔からいるメンバーは毎年一番悩んでいるところやとは思うんですけど。でも、年々よくなっていった実感は、みんなが持っている。この間、練習見に来てもらったときの「あの曲」が今までで一番難しいんですよ。

### 選曲と合奏する喜び

山崎：練習見学に伺った時に演奏されていた「あの曲」についてちょっとヒントをいただきたい

んですけど。あれはコンクールの課題曲ですか。いるか：とある学校がコンクールでめちゃくちゃよく演奏してる曲です。だから、探せば出てくると思うんですけど。そのうちチラシにも載せますので。曲名を。

夷：聞いていいのかわかんないですけど、なんか、それ『ユーフォ』に関係ある？

いるか：ある。タイトルだけは出てきた。

片山：わかりました。

いるか：曲情報も今はまだ、あれなんですけど。楽団の演奏能力的なことも加味して曲は決めるので、『ユーフォ』に出てくる曲、そのなかで挑戦しがいのある曲なのか、いや、ちょっと難しすぎるとか、長すぎるとか。もう「プロヴァンス（の風）」ええやろ、みたいな。そんな話もしながら次これいけるんちゃうかなんて相談して決めてますね。

夷：やっぱり、あの「リズと青い鳥」が一番難易度高いじゃないですか。フルートとか、ハーブから、楽器そろえるっていうのもそうだし。ウィンドマシン<sup>4)</sup>もそうだし。

いるか：『ユーフォ』に出てくる曲の、ユーフォオリジナルの曲のなかで、やっぱ一番、吹奏楽曲として、演奏しがいのあるのは「リズ」なのかな。やっぱり曲も長いし。特に第1、第2楽章なんか、作品本編でもそんなに触れられないから逆にイメージを膨らませにくいとか。そういう難しさもあったりとか。各パートそれぞれに華があるってことは、各パートそれぞれに、それなりに、演奏力が求められるんで、そういう意味の大変さもありますよね。「響け！ユーフォニアム<sup>5)</sup>」のウィンドオーケストラバージョンとかなんか、他のオリジナル曲にもそれぞれ難しいところがあったりとかしますけども。

夷：「三日月の舞」から次の年の（コンクールの）自由曲って、難易度が上がってるな、みたいな

あるんですか。それはやっぱり（前年度と）同じぐらい大変。

いるか：どうかな。パートによる。

夷：なるほど。

山崎：前回、（練習に）お邪魔さしてもらったときに、よりによって一番難しい曲だったんです。皆さんどどんげっそりしていくんですよ（笑）。体力も使うんだけど、やっぱり気が張るんですよ。譜面と同時に、（指揮者の）TOMYさんから目を離しちゃ駄目って感じで。

いるか：さっき「リズ」に、各パートに華があるって言ったんですけど。各パートに華があるって、逆に言うと、自分が全然吹かない場所もけっこうあって。長尺符っていうんですけど、二十何小節休みとか、そんなのがあって。今どこだっけ？とかが。

片山：なりますよね。

いるか：そう。（今どこにいるのか）わかんなくなるのを「落ちる」っていうんですけど、こう、「リズ」とは比べものにならないぐらい、みんなが落ちる曲なんですよ。

片山：「リズ」でも大概ゆっくりで落ちるケースも多いのに。

いるか：そう。でも、リズは、あ、ここのこのメロディーが終わったら自分も入る、みたいなのがわかりやすいんだけど、「あの曲」は）けっこう複雑な曲なんで、8小節のメロディーのうちの3小節目から5小節目だけホルンと一緒に吹くとか、そういう曲だから、「隣を（の様子を）見て入ってたらあかん」とか指揮者のTOMYさんに言われて。自分で数えて入るほうが合うんや、みたいな感じで。あ、TOMYさんそんな怒って言ってるわけじゃないですよ（笑）。

夷：まあ、言いそうな感じするけど。（全員で笑う）

山崎：ただ、それぐらい警告しないと、（今演

奏している箇所が) 取れなくなっちゃうんですよね。

いるか: まだ今年度の初めのほうなんで、みんな譜面見ながら、1、2、TOMYさんのほうを、こうやってちらっと見ながら、1、2、3、4、よっしゃって、こう。

片山: ね、演奏者って、TOMYさんのこっち振って、こっちやって、その次、ここ、来るからみたいな、なんか、振りで覚えてる部分もあるでしょ。

山崎: あるかもしれないですね。そろそろだっというところがね。

片山: で、こう来たから、次やな、みたいな。

山崎: そろそろ、そろそろ、そろそろ、みたいな。それから、あらかじめ練習しておかないとほんと楽しくないですよ。で、合奏なので、ある程度できるようになったものをみんなと合わせるための時間なんで、それに間に合っていないと、いろいろつらいものはつらいですね。

片山: 練習してこないとね。

いるか: だから、楽団としてそういう(合奏のために練習してくる)ことをみんながきちっとやれるようになってくるまでに、やっぱり何年かかかってますし、どうしても、その経験のなかった人とかは、その辺がちょっとピンと来なかったりとか。やっぱり(事前の練習が必要だと)言ってもやってきてくれないような人は、何人かの方はやっぱり、ちょっとごめんって言って、お断りしたこともあるし。

片山・夷: なるほど。

山崎: もはやただのファン集団じゃないんですよ。最初の音の立ち上がりから、すでに経験を積まれた方が集まってるなって思いました。

いるか: 猛者の奏者も何人かいるんで、そういう人たちが引っ張ってくれて、ここまで来てるのもあるんだけど。なんていうのかな、ほんとに練習風景だけ見てたら、うん? あれ、普通の

楽団ちゃうの? ぐらいになってきてて。何か特殊なものを期待して来られると、いや、別に普通の楽団ですけどって。

夷: 普通にちゃんとやってもらわなきゃ困りますよ、みたいな、そういう感じだったんですね。たぶん。

いるか: そういうところを、まあ、ある意味目指しては来てたので、いい変化かなとは思ってる。

### 恒常的に続けるには

山崎: じゃあ、その、初期の方も含めて、在籍されている人数はどれくらいですか?

いるか: 今年度は60人ちょっとですね。

片山: 入れ替わりながらも、ずっとキープしてますよね。

いるか: そうですね。

夷: 恒常的にいる人は何人くらいですかね。

いるか: 数えたことがない(笑)。途中抜けて、また戻ってくるみたいな人がいるから、その時点で数える気がなくなる。でも、半数以上は残っているかな。

夷: けっこう多いですね。

片山: 好きなんでしょうね。お互い。

夷: BTC<sup>6)</sup>でも、もう半分もいない。アクティブメンバーは、もう半分切ってるんですけどね。

いるか: あ、そんな感じですか。

夷: たぶん二百何十だけど、たぶん100くらい。

いるか: あの、私もアクティブメンバーに入れる、でいいのかなどうか、全然わからないけど。

片山: 演奏活動自体が、巡礼活動に該当するって。

夷: 一応、BTCにはあるので。地域貢献枠。

片山: 地域貢献枠。

夷: 「カット合わせ<sup>7)</sup>」だけじゃないんですよ。すみません。関係ない話して。

山崎：いやいや。(舞台) 探訪でカット合わせとかやる人たちっていうのは、演奏のように、事前に練習をしないと楽しめないっていう集団に比べると、圧倒的に参加のハードルは低いわけですね。

夷：ま、そうですね。

山崎：にもかかわらず、半数ぐらいと言うのが。

夷：ごめんなさい。全然、話、外れちゃうんですけども。これ、Aさんが言っていて、私もそう感じるんですけども。だいたい、いわゆる最速探訪<sup>8)</sup>とか、ガリガリ活動して、ブログ更新するのって、だいたい3年で燃え尽きるって言われています(笑)。

山崎：ああ、なるほど。

夷：てか、私ら3年で飽きました。

山崎：やっぱり、長々続けることがかなり厳しい。

夷：うん。あとはもう緩く、誰もやらないものを。はやりのものじゃない、誰も知らない、まだ、そんな人気になってないコミックの聖地巡礼をするとかっていうかたちで、それに喜びを見いだしてる人はけっこう長く続いているんですよ。やっぱり、はやりのアニメを追いかけてやっていると、やっぱりいずれ無理が来るなというか。山崎：スピード勝負になると、かなりきついですよね。

夷：そうですね。スピード勝負だし、本当に、本人楽しんでるのかなって不思議になります。

片山：私もそういう人たち見てる。

夷：やってた身から言っって、なんか、途中からやっぱり、好きな作品じゃなけりゃやりたくないんですよ。そこまで情熱向けられないんで。それでもやり続けてる人たちって、ほんとに楽しんでるのかなというの思います。別にそれを否定するわけじゃないんですけど。

山崎：また、その楽しみ方が違うでしょうね。

夷：そうですね。

山崎：話を戻しますね。長く続くっていうこと、しかも、練習が必要で、おまけに練習が家でできないんですよね。管楽器って。私が聞いたある人は、常にカラオケボックスに。

夷：とか、河原でやるとか。

いるか：そうですね。よっぽどの田舎じゃないと、みんなカラオケにこもってますね。

片山：あの、『ユーフォ』のファンの人が、めっちゃちっちゃい誕生会を、カラオケボックスで主催するっていうのありましたね。なんでわざわざ(カラオケボックスで)って言ったら、結局誕生会で吹くんで。みんな。

山崎：あ、演奏するから？

片山：誕生会、兼、ちょっと吹いて、で、合わせてみて。とか、なんか、非常に自由な楽しみ方するので、ま、カラオケボックスが一番いいんですよね。それから楽団の方は、追っかけ活動とかもけっこうしはる。ま、こういうこと(と言って過去のいるかさんのプレゼンテーションを指す)もするわけですから。フード部みたい。

いるか：サブカル吹奏楽のなかでも、作品自体が吹奏楽を扱っているという特殊性と、一方であくまでアニメ作品がきっかけでこの楽団に来ているっていうところがあって。もともと吹奏楽の要素に惹かれてこの楽団に来てっていう人と、どちらかっていうとアニメを見てた人が、『ユーフォ』きっかけで何か楽器を始めました、みたいな人と。あるいは、そのどっちにも当てはまる人と。それこそ、もともとサブカル吹奏楽をやった人たちがその真ん中にいると思うんですけど。で、なんかその辺がうまく混ざって。

片山：確かに。

いるか：そうなってる感じがしますかね。基本的にアニメ寄りな人ほどはっちゃけるので、硬派にやってきた人は、ちょっとそれを見て、引

いたりすることはありますけど。

夷：なんか、逆にそこで対立が生まれたりしないんですか。いや、北宇治の方針はこんなふざけたもんじゃないとか。

いるか：あの、団長が僕なんで。(一同大爆笑)

片山：いるかさんが代表やってることが絶妙なんですよね。

夷：確かに。

いるか：そうなんですかね。

### 開かれた門戸

片山：そういう意味では、他の楽団とはとは似て非なるものですよ。そもそも作品ありきじゃないんで。

山崎：コンセプトが先なんです。

夷：しかも、なんか、音楽を専門的に学んでないと入れないところもあるらしいですね。

片山：そうなんです。

夷：吹奏楽っていうか、あの、もう、それをメインでやっていて、なおかつアニメが好きな人っていう、そういう、どっちかという音楽の技量をまず優先して、で、それでアニメが好きな人は入ってくださって感じでやるところ。

片山：初心者が入れないんですね。

夷：あ、そうですね。

片山：だから北宇治はそこ(音楽を専門としていない人)に、開いているので。

山崎：あの、どういう経緯で、人が集まるのかっていうのがね、ちょっと私も気になって。「オケ専<sup>9)</sup>」っていうサイトあるじゃないですか。

いるか：はい。

山崎：北宇治も載ってるんですけど。私、楽団の集まりって、地域でつながる楽団っていうのと、それから組織で集まる楽団っていう、2大勢力があると思ってたんです。組織というのは、

要するに音大や部活出身者による集まりで、学校の名はグループ名に入れてないんだけど出身者で結成されているみたいなのも含めての組織なんですけど。で、そうしたら、京都だけで調べたら、吹奏楽っていうカテゴリーに入ってるのが19あるんですね。で、そのうち「学校縁(学校を介した繋がり)」だなんて明らかにわかるものは4つ。これは住人って感じかなっていうのは7つ。残り8つなんですけど。そのなかに、北宇治OBがあるんですよ。ただ、ほかもどこかの大学の何期生で集まったみたいなものというものもある。そういう点では北宇治はいろんな人たちが集まって、しかも『ユーフォ』という作品でつながるって興味深いなって思ってます。もう少し丁寧に調べる必要はありますが、地域の繋がりでもなく、組織の繋がりでもない楽団として、北宇治は数少ない例なんじゃないかなって思います。

片山：いるかさん。コロナ始まってからでも、けっこう(団員)入ってきてはるでしょ。

いるか：そうですね。

片山：で、もうちょっと言うなら、コロナの手前、要するに『誓いのフィナーレ<sup>10)</sup>』(2019)が終わってから、作品としては間が空いてるわけですよ。はっきり言うと。なのに、新しい人がどんどん継続して入ってくるんですね。辞めてく人もいるけど、だから総数が減らないっていう状態なんです。だから、それがすごいなあといいんですけど。なんでなんですかね？

いるか：うーん。

片山：今のボーカリストとかもそうでしょ？

いるか：そうですね。2018年が『リズ』ですね。2019年に『誓いのフィナーレ』があって。19年度の終わりがコロナ始まって。20年度、21年度が、一番コロナで何もできなかったときで。ただまあ、その時期も、状況がどう変わるかわからんし、練習だけしとこうか、みたいな感じ



で、コツコツやってたんですね。だから、不完全燃焼だったのをなんとかしたいっていう人たちは、22年度も参加してくれて、この前の2月のコンサートにつながったのかなって思います。やっぱりみんな『ユーフォ』の楽曲をみんなで作りたいって、その目標の部分がしっかりしてると、やったろうかという感じにはなってくれてるのかなと思いますね。

片山：モチベーションは維持されてるのね。

いるか：そうですね。コロナのことって言っても結局去年度からは、それなりに演奏会やらなんやらやれるようになってるので、そこも大きいかもしれないですね。逆にあの空白の2年間、どうやって、どうやって……。

夷：どうやって乗り切ったかわからないね。

いるか：でも。なんだろう、空白の2年間のあいだに、今年の2月の「ファンコン<sup>11)</sup>」

の、寸劇のほうもすごいいい感じにできたんですけど。あの脚本自体は、もともと映画だからっていうのもあるけど、2年以上前にできてたんですよ。

夷：ああ、そうなんですか。

いるか：で、そこからずるずると。せっかく作ってたやつをやり切りたいみたいなのがあって。

夷：時間かけりゃかけるほどね、やっぱり磨きもかかるし。

いるか：そうなんですね。だから、あの、「サンフェス<sup>12)</sup>」の衣装をつくることも、もうそのころには決まってたから、なんか、ここまで来たら、みたいな感じがみんなあったと思いますよ。

片山：なるほど。板の上でやりたい思いは、板の上でやらない限りは終わらないんでね。

## 緩やかなメンバーの結びつきと組織のあり方

山崎：メンバー同士の、コミュニケーションについて伺いたいですけど。

いるか：はい。

山崎：コミュニケーションのツールみたいなものってあるんですか。

夷：BAND<sup>13)</sup>とかやってんですか。

いるか：そうですね。一応はBAND。で、Twitterと、あとは、個別にLINEを知ってる人たちはそれも使ってるでしょうけど。

夷：全体に対する。かつてのmixiみたいな、ああいうサービスって言ったらBANDが一番ですよ。

いるか：そうですね。楽団のことをやり取りしようとなったらBAND。

夷：しかも、個別招待制だから、外に漏れないようにお願いすることもできる。

山崎：例えば、練習いつやりましょうみたいな、話し合いみたいなとかはBANDでおこなわれている。

いるか：そういうことはBANDですね。あと、なんの曲演奏しようとか、どこそこのイベント出るけど、誰か出れますかとか。そういうのはBANDですね。

山崎：それらを事務連絡と仮にするならば、そうじゃないコミュニケーションみたいなのを取ることはあるんですか。個別ですか。

いるか：それがTwitterだったり、LINEだったり、BAND内でもやり取りしてる人はいるかもしれないけど、なんとも。

山崎：なるほど。

いるか：さっきのどこから来てるかの話じゃないけど、例えば滋賀勢だけでちょっとご飯行こうやっていうのをやったりみたいなのは、当人たちのLINEだったりとか、Twitter上で「明

日どこそこの楽器屋行くんだけど、一緒に行かない？」みたいなのにリプライがついて、みんなで行ってるって見たいな。

夷：ああ、だから楽団のなかにもいくつか小グループがあって。

いるか：あるんだよね。

山崎：おしゃべりっぽいものは Twitter で流して。見てる人は見てるかもしれない、みたいな感じですね。

いるか：そうですね。「もらった物でこれつくった」「うまそう。届けてください」とか。(一同、苦笑)

山崎：北宇治 OB フード部<sup>14)</sup> みたいな感じもある。

夷：1 回同人誌。要するに、コミケ参加してたんですよ？

いるか：そうそう。フード部は何回か。

夷：それで、コミケも、フード部で登録してたんでしたっけ。

山崎：スペースを取ってしまった。すごい。

夷：あ、そうですね。「ユーフォ島<sup>15)</sup>」のなかに、スペース持っていらしゃいますもんね。

いるか：(団員の) B さんは、もともとがコスプレとかもやってた人なんで。その辺のこだわりがすごいんですよ。

山崎：ああ。

いるか：だからもう「再現しちゃう！」みたいな。

夷：そういう、同人イベントでもしてるってことだよな。

山崎：なるほど。じゃあ、練習のときのコミュニケーションってどんな感じですか。みんなでお話しする機会があるんですか。それとも合奏する時間だけ皆さん一緒にいるって感じですか。

いるか：えと、個別にパート練習は集まってやってる人たちもいます。個人練と、合奏のときと。あとはどうだろう？

山崎：練習に伺ったときには、たぶんへろへろだったからだと思うんですけど、それぞれの仲よしさんでお話ししてるみたいな印象を受けました。

いるか：「ここがうまくできなくて」「それ、こうやってみたらいいよ」みたいな。そういうやり取りは、もうほんと、隙間に発生するかしないかみたいなところはあります。なんなら合奏のちょっとした隙間に、TOMY さんがしゃべってるのを邪魔しない程度にやってることもあるし。休憩中に「さっきのとこだけどさ」、みたいなことをやることもあるし。この間(山崎が訪問した練習の時)のは本当にね、珍しいんですよ。1 曲 1 時間ぐらいつと合奏やってるのって。それもあって、たぶんみんなへろへろだったんだと思うんですけど。吹かない小節が長ければ長いほど、かえって疲れる、みたいなものがあるんで。あとはパート内や、パート間のこととかまで気にかける人は、ちょこちょこ雑談のために歩いてきてるかのようで「やっぱそこいらなくね？」とか重要なことを言うてくる人もいるし。

片山：パートリーダー的な。

夷：パートリーダーが、ちゃんと組織としてなければ、なんか、あれじゃない。それってどうなってんの？

いるか：パートリーダーいますね。

夷：団長がいるかさんと、まあ、指揮者は、指揮者は TOMY さん。

いるか：はい。

夷：その下にパートリーダーがぶら下がってるって感じ。

いるか：ぶら下がるというよりは、パートリーダーと、それとは別に運営メンバーがいて、で、運営メンバー兼パートリーダーみたいな人もいて。ちょっと複雑なんですけど。

夷：自分のイメージだと、運営メンバーって、

サークルの運営っていうか、会場を押さえるとか、そういう感じの。

いるか：そう。

夷：それと、演奏をどう成り立たせるかっていう意味での、その組織って、やっぱり別じゃないかって思って。演奏の組織ってどうやってんのかって。

いるか：そっちはまあ、パートリーダーですね。

夷：やっぱり。あと、指揮の TOMY さん。

いるか：そうですね。

山崎：じゃあ、いるかさんはどちらかといえば、運営メンバー？

いるか：そうですね。僕は。

山崎：練習のあとに飲みに行くことが楽しみだ、みたいなグループも他所にはあるみたいですけど。

いるか：はいはいはい。

山崎：でも、「次、別の楽団の練習です。バイバイ」があるとすると、そういういうのは成り立ちませんよね。

夷：楽器の搬送とかありますからね。

いるか：練習のあとのご飯とかも、コロナでほぼなくなっちゃって。で、今あるとしたら、それこそ、仲のいい小グループで行くとか、そういうぐらいですかね。(練習)場所がそもそも遠いから、もう帰るわって人もいるし。次の練習があってっていうのは、ここは5時まで練習なんだけど、4時になって、もう次移動するんで帰りますとかいう人もいるし。

夷：全体飲み会みたいな、そういうのは。

いるか：それはなくなりましたね。このあいだの2月のコンサートの打ち上げで、めっちゃ久しぶりに。

山崎：楽器以外のコミュニケーションをなぜ何ったのかというと、作品で集まってる人たちだからこそ作品に関する話がしたいという欲求があるのかなとか、ないのかなとか思って。私、

『ユーリ!!! on ICE』の大人のファンたちを調査していて、スケート部があるんですよ。それぞれのリンクに。で、いつ何時やりましょうという取り決めは特にないんです。ただ Twitter に今日行きます、みたいな投稿がなされて集まって。で、前後で食事したりするというのが、ワンセットっぽいので。似たようなものがあるんかなと思って伺ったんです。でも練習のときには、そんな余裕ないですよ。皆さん。

いるか：そりゃそうですね。

山崎：さっきあんなふうに言われたんだから、あれどうしたらいいんだろう、みたいに考え続けてる人もいるし。

片山：確かにね。余裕はそんなに。

山崎：練習の見学に行ったときに、自己紹介があったんですね。何人か新しく入ってこられた人たちの。推しキャラは誰ですって言った人って1人しかなくて。『ユーフォ』で集まった人たちと私の頭のなかにあったものですから、推しの話はスルーなの?と思ったんです。

いるか：あれたぶんね、緊張で覚えきれなかったんだと思う。「これ言って、これ言って、これ言う…!」みたいな感じで。あとは、なんだろう、推しキャラのこととかも、ちょっとシャイで言えなかったりとか、いろんな人がいるので。その辺は、まあ別に言わなかったからいうて、どうってことないんだけど。

山崎：ええ、もちろんそうですね。

いるか：そういう人の Twitter アカウントを開いたら、意外とはっちゃけてたりするので、こういうキャラか、よろしくお願ひします、みたいな感じですけど。

夷：終わった後も含めて楽しむか、本編を存分に楽しむかっていう楽しみ方のジェンダー差っていうのはあると思って。で、それがまあ、緩いかたちで混合してるのは、北宇治 OB じゃないかなって感じはしています。

山崎：そうですね。ほどよくつながるっていう感じがあって。私は、その感じが、すごくいいなと思って拝見してたんですね。

片山：吹奏楽がっちりという吹奏楽団は、たぶん、緩くないんでね。その辺も。それは、けっこうまともなんですね。

いるか：だから、それこそ、演奏外でもがつりみんなで飲みに行くぜ、おー、みたいなノリではないので。あの、職場の飲み会じゃないけども、やっぱり行きたくない人もいるだろうし、で、1回ぐらいはあって思っても、やっぱり「本番の打ち上げだけでいいんじゃないか」ぐらいのみみたいなところは、ちょっとあるかな。

片山：北宇治は、遠方から来てはるっていうのが常に、絶対あるんで。

山崎：なるほど。

夷：まあ、なんちゅうか、社会人サークルっていうのもいろいろあるじゃないですか。あの、ファン団体として、コンサートやりますってところと、吹奏楽コンクールの社会人の部で全国大会金賞目指すみたいな、そういうのを目指してる人たちもいるし。それって、やっぱりカラーは違ってくるのかなっていう。

片山：で、北宇治のほどよい、緩さっていうか、あのボーダレスさっていうのは、やっぱりいるかさそのものやと、私は思うんですけどね。いるかさんがものすごいボーダレスやから。だいたい普通、ギター弾きの人が、吹奏楽と一緒にやりませんかって、言うてこないと思いますし。けっこう北宇治の感じも、それに近い感じがしますけどね。

山崎：しかも60人ぐらいの大所帯ですよ。大変なことだと思うんですけど。

### 指揮者と音楽を作っていく

片山：TOMYさんなんかね、ほんまに専門家

なんやけど。わりといろんなものが好きで、自転車やったり、『ユーフォ』を好きになったりとか。技術職の方で、トロンボーンバンバンに吹いて、で、なおかつ、指揮もされてて。

いるか：彼は製造系のサラリーマンなんで。

夷：そうやんな。

いるか：だから、そんだけね、所帯を持って、趣味にいそしんで。

片山：楽しんでありますね。人生をね。

夷：え、TOMYさんって、どこで音楽勉強したんかな。趣味でできる範囲じゃないんじゃないかなっていう気がする。

片山：師事したりとか？

夷：団の方向性を決めるっていうあの才能ってなんなん？

いるか：そう、なんか、職人気質っていうか、研究者っぽいところみたいなのが彼はあって。その、仕事だけじゃなくて、昔から音楽自体もすごく真剣にやってたんだらうなっていうのは、伺えますよね。

夷：ああ、だから、経験としては、一応、吹奏楽部に、入ったとか、それから自分で深めていったって感じなんですかね。

いるか：うん。

夷：それであんなふうに音楽が作れるんだ、すごいですね。

いるか：コンクールで賞を獲るよりも、自分の作りたい音楽を求めている。指揮者のセミナーとかに参加したり。

夷：わ、意識高。

片山：理系ですね。アプローチが。

いるか：世界的に有名な指揮の先生の映像とかを見て、「この人がこうやってるのはこういう意味があって、ここはやっぱり指揮の基本としてすごく大事なことだから、できるようにならないとね」、みたいな話をされるんですよ。「この人すごい先生だから」から入って引っ張って

くるんじゃないで、このすごい先生がやってることの何がすごいのかをちゃんと理解して、自分でやってるっていう人だから。音楽に熱心なことがよくわかる。

片山：だから団員からの信頼が厚いですね。

いるか：そうですね。だから極端に言うと、あんまり『ユーフォ』知らなかったっていう人も入ってきてはいるんだけど。そういう人たちがなんで続いているかっていったら、やっぱりTOMYさんの指揮の影響は大きいと思いますね。

片山：なるほど。うまくなるし、丁寧になるし、楽しさを教えてくれるしみたいな。そういうことですね。

いるか：そうですね。

山崎：ちなみに、TOMYさんはどういう経緯で入ってこられたんですか。

いるか：TOMYさんは、もう、最初っから。

山崎：最初から。『ユーフォ』のファンだった。

片山：TOMYさんね、最初9月ぐらいやったと思いますよ。

いるか：2015年のね、9月ですよ。

山崎：最初の、あの、「サイゼ会」ですか。

いるか：「香織と秀一（いずれも『ユーフォ』のキャラクター）の会」です。

片山：それからね、3カ月連続ぐらいで、イベントやってたのに毎月来られる。ほんで、11月、12月ぐらいでは、もうすでに、（楽団結成を）ささやき合ってたんじゃないかという。やろうぜ、やろうぜ、みたいな感じ。最初はセッションやったと思うんですけども。

山崎：で、どういう経緯で指揮者に。

いるか：サイゼで、僕、やりましょか、みたいなことを言ってた覚えはありますね。

片山：すごいやりたいっていう意思が、初めからね、おありやったですよ。

山崎：TOMYさんの指揮、夷さんもおっしゃっ

てましたけど、理屈がちゃんとあるんですよ。だから相当勉強した人だなと思ってたんですよ。でも、いるかさんのお話からいただくのは、どこかふわっとした情報なんですよ。指揮をする人って、多くの場合どこそこに師事をしてなどの経歴が、演奏会で明記されるんですよ。

夷：履歴が重要視されるんですか。

山崎：明記されることが多いです。

いるか：聞いたらあると思うんですけど。

山崎：メンバーの皆さんがあまり重視していない。それは、裏を返せば、彼の、指揮そのものにみんながついてきてるっていうことなんだなって思ったんですよ。

いるか：なんかあれ（経歴）で流派みたいなのがわかるんでしょうね。なんだろう、ギターの話とかだと、あ、この人はあのバンドの影響を受けてるのかな、みたいな、その、そういうのと一緒に、指揮とかは振るまでわかんないから、そういうのを書くのかなとか。

### 身内で賄える編曲

山崎：譜面って、どんなふうに関達されてますか。

いるか：譜面は、もちろん購入していますね。

山崎：アレンジしてもらうことってあるんですか。

いるか：それもあります。楽譜が出てないものがあるので、耳コピのアレンジを今もしてもらってる曲もありますね。

山崎：それはやっぱり業者に出すんですか。

いるか：いや、まず団内の有志、次いで団外の有志。業者さんまで行くことは、北宇治に関しては、今のところないですけど。

山崎：すごい。だいたい身内で終わるんですよ。

いるか：「できる」っていう人はちらほらいるので。

夷：そういう業界、あんまりわかんないですけど。業者出すのが当たり前なんですか。

山崎：(当たり前かどうかは調べていませんが)業者あります。

夷：このアニメソングを吹奏楽バージョンにしてくださいみたいな。

山崎：あります。

片山：それなりの費用かかりますよね？

山崎：けっこうかかります。コード譜だけでも、けっこうな値段ですね。だから、それが身内で賄えちゃうってことは、すごいことだなと思って。

いるか：なんか、だいたい2-3人くらいはいるんですよ。できちゃう人が。毎年。

片山：さすがにね。指揮者の方はともかく。ト音記号も、ヘ音記号も、すぐ読めたりしないですからね。

いるか：そうですね。だから普段から自分でも、耳コピしたり、アレンジしたり、スコアを見たりとか。

片山：そうか、そうか。

いるか：そうですね。何名かは、大曲になればなるほどスコアも自分で買うみたいな人とかはいますね。高いんですよ。スコアって。

片山・夷：へえ。

山崎：パート譜という、自分のパートのところだけ書かれたのがあって。で、もう1つはフルスコアっていうのがあって。で、フルスコアになると、どうなんでしょう。演奏される人にとったら。

片山：ばんばんめくらないといかん。

いるか：お勉強のために。

山崎：お勉強のため？

いるか：パート譜と、音源だけではちょっと聞き取れない場所、あれ？どうなってんの？みたいなのがあったりとかして。けっこう吹奏楽曲みたいな、ホールで一発撮りしました、みたい

な音源なんて、端っこのほうの音が拾われてなかったりとか。打楽器だと、うん？ここ、ここ入ってなのに、なんか鳴ってない気がするっていうのがあったり。

片山：やってる人はわかりますもんね。あとで聞いたら。

いるか：はい。スコアは買わないと。

山崎：楽譜をちゃんと読む、ちゃんと言ってたらおかしいな。私、あんまりその、吹奏楽の人たちがどうやって譜面を読んでいるのか知らないの。耳から入って譜面に移るみたいな、そういう認識をされてるのかなとか思ってたんですけど。今おられるメンバーとかには、譜面から入られる人はけっこういるんですか。

いるか：そうですね。ちらほら耳コピ派の人がいるんですけど、譜面読めませんみたいな。でも、まあ、比率で言うと、アニメ見てから楽器始めました勢よりは、もともとなんかやってた人のほうが多いのは多いので、サブカルにどの程度傾倒していたかはともかくとして。その辺の人たちはみんな読めますね。

山崎：やっぱりある程度経験があって。例えば中学のときにやってて、今、もう一度みたいな感じで、経験があってここに入って来られる。みたいな。そういう感じですね？

いるか：そう、そう。

山崎：ありがとうございます。

片山：ギター弾きの人って、けっこう譜面が読めない人も多いと思うんですけど、でも、(いるかさんは) けっこう読める状態で。

いるか：そうですね。あの、さっきのデジタル化の波にあらがうかのように、僕は今でも手書きするんですね。自分で1回書くと覚えるんですよ。で、あとは、書いておくと、その曲の構成とか、ここで1回飛ぶとか、そんなのがわかってくるので。ほかのパートが何してるのかも書き込んでおいて、落ちなくなるとか。ここで

24小節休みって書いてあったら、僕、全部24小節空白を書くんですね。

片山：数えなくていいように、これでいいようにっていう。

いるか：その24小節間のほかのパートの音符も書いといたら、迷わないで。

山崎：（今どこが演奏されているのかを）取れますよね。

いるか：そうなんですよ。僕自身はどっちかっていうと、デスクトップミュージックで作曲するみたいなことがやりたくて音楽を始めた人間なので。一時期もちょっとボカロもやってたんですけど。だから、譜面は最初から使ってたね。

山崎：なるほど。

いるか：でも、僕もピアノロールみたいな、色つきの画面じゃなくて、五線譜が画面に表示される状態でずっとやってて。ピアノロールとか、かえって見づらくてわからないっていう。

山崎：（あれは）ちょっと慣れがいますよね。

夷：いるかさんは、なんで吹奏楽とかやってる？学生時代からやってて、ネット系？いやボカロ系の？

いるか：いや、いや。最初は完全に軽音楽で入って、吹奏楽はほぼほぼなくて。

山崎：（DTMのように）共同作業で音楽を作らなくなる流れが一方にあって、吹奏楽はそれとは対極ですよ。みんないないとできないですもんね。

片山：ああ、ほんまですよ。そうやね。

山崎：うん。そういう意味でも

片山：バリバリのマニュアルが自然。

山崎：バンドも今、ほとんど成り立たないって言って、この間ライブハウスのオーナーと話をする機会があっておっしゃってました。「バンドってカロリーが高い」って彼は言うんですね。メンバーと常にコミュニケーション取って、内

部の結束を高めていかなきゃいけない。高めていかないと、今までは大きくなれなかった。で、今そのままの考えで関わっていくと、「俺今日はバイトがあります」みたいなことで、バンドが結束していくことが難しい。そうやってバンドは解体していくんだっていうんです。

夷：それはあれですか。いわゆる音楽に対する、自分のなかでの優先度っていうのが昔は高かったけど、今の人たちは低いとか、そういう話ですか。

山崎：うん。個人化の話も関わってくるとは思うんですね。自分の生活が大事で、音楽はその次みたいな。1回コミュニケーションがそうやってこじれると。

夷：まあ、難しいですね。それ確かに。

片山：なんかヒューマンなもんじゃなくなるわね。だから、1人でやっぱり機械に向かってつくれるものっていう。

山崎：そう。そっちのほうが楽やんっていう人が出てくるし。

片山：デジタル前提やんね。

### 「辞めるとは言っていない」で続いてきた

山崎：一方で、こうやって、その、みんなが集まって音出そうよとか。しかもそれがね、1つの作品にインスパイアされてる。ジャンルだったらまだやりやすいと思うんです。ゲーム音楽のあの曲この曲がやりたいとかね。生で聴きたいとか言って集まる想像が付きやすい。けれども、1つの作品でここまで続くって本当にすごいなって思うんです。続いてきたのって、なんでなのでしょうね。

いるか：1つはやっぱり目標とか、楽団の存在意義っていうと大げさだけど、コンサートの開催っていうことと、宇治を舞台にした作品の曲を宇治でやりましようっていう、存在目的みた

いなのがちゃんとあること。で、メンバーが、出たり入ったりみたいなのを緩く設定してるのも1個あると思うし、あとはねえ、僕がけっこう「しんどいけどやめるとは言っていない」みたいなところが(笑)。なんて言うのかな。それこそコロナのときとかは、また中止ちゃうん、みたいなのがやっぱりあるんですよ。そういう空気になったりとか。で中止やったらしゃあないけどなってなって、で、「やめるとは言っていない」みたいな。

山崎：なるほど。だから。

いるか：そう、そう。だから中にはやっぱり、「もうええんちゃうの」みたいに思ってる人もいたかもしれないんだけど。でも、やり始めて本番が近づくと、みんな嫌でも気合が入るから、僕はそれを見てニヤニヤしてるみたいな、ところはあるのかもしれないですね。だから、なんだろう、あの続けるって言っても、そんな中高生の部活じゃないんで、コンスタントに熱を入れて続ける必要はないと思ってて。今年ちょっと子ども生まれたし、忙しいしで、参加やめとくわって言って、オッケーって、またお子さん見に行くわ、みたいな。緩い感じですよ。合奏の欠席のときの理由も、別に言わなくていいですっていうふうにして。みんなわりと、かくかくしかじかなんで休みます、すみません、みたいな、それこそ、最近入った人とかはやっぱり気を遣った感じのことを言うてるんだけど、別にそんな、「そこは、あの、いいんで」って。だから、なんだろう、締めるとこ締めるじゃないけど、その辺りができて、限りなくほかが緩いみたいなふうに、だんだんやってきたのかな。最初からそういうことがきっちりできてたわけでもないの。特に今思ったらね。最初のころなんて、僕が一番はっちゃけてましたからね。(爆笑)

片山：それは当然、その、それが面白くて始め

はったわけですから。

山崎：なるほど。

いるか：だんだんこう、いろんなことが最適化されてきた話ですよ。

### 北宇治 OB が培ってきた信頼

夷：変な話ですけど、来年、『響け!』の最終章<sup>16)</sup>やるじゃないですか。そこをゴールとやってわけじゃなくて、この先も続けていく?

いるか：わからない。

夷：けっこうコンテンツの終わりで、区切りをつけることもあるじゃないですか。

いるか：なんかね、解散しますってしてしまったほうが、有終の美っぽいものがあるし、でも、「そして次の曲が始まるのです」的な余地を残しておきたい気もするし、どうなのかな。

山崎：そもそも OB 楽団ですからね。

いるか：そうなんですよ。

片山：スピンアウトストーリーが突然出始めるとかね。

いるか：特に演奏会はしなくなっちゃったんだけど、宇治橋(通り)のイベント<sup>17)</sup>には毎年出てるみたいな、そういう感じで続いていくのもありかもしれないしね。どうしようかなとは思ってますね。

片山：まあ、ファンの楽しみ方として、なんて言うんですかね、アフターストーリーを勝手につくっていくっていうのは、ファンの正当な楽しみ方の1つやとは思うんですよ。それが別にストーリーじゃなくて、音楽バージョンでおこなわれてもいいのかもしれないです。解散しちゃうとできなくなるけど、「そして次の曲が始まるのです」で止まっといたら、コンボで自由にそういうのをやってもいいわけだし。

いるか：やっぱりね、存在自体は残しておかないと。例えばの話、ほんとに楽団として活動終



了をしますってしてしまうと、そのあとで名を語ろうとする人が出ないとも限らない。そういう問題もちょっと頭の片隅にはあるので。

片山：「シン・北宇治高校 OB 吹奏楽団」みたいに名乗るやつらが出てくると。

いるか：われわれが引き継いでやりますって言って、中身開けたら、誰やおまえら、みたいな。それはそれで、別なトラブルとかになりにかねないので。

片山：ブランド化しちゃった名前なんで、扱いは気をつけないといけないかもしれないですね。

いるか：そうなんですよね。

## さいごに

山崎：最初ね、北宇治のお話伺いたいなと思ってたのは、昔、日下部吉彦っていう音楽評論家が女声合唱団は3年でつぶれるって言ってたことが印象に残っていて。3年目って組織にとって大変なんですよね。1年目は立ち上げ当時の情熱がある。2年目は続けられる喜びがある。3年目になると当初のモチベーションになっていたものがなくなってしまう。じっさい楽しみで集まる組織で3年目に苦勞しているケースを、私もいくつか見てきてて。北宇治OBのように続いている、しかも、コロナという集まることを根こそぎ否定するような流れがありながらも続けてきて。さらにまた音楽会やろうっていう流れになってきてるグループって、すごくなって思ったんです。一度、いるかさんご自身で発表してくださいましたけど、今日、じっくりお話聞くことで、新しい発見がありました。ざっと8年の歩みを記録させていただいたところで終わりにしようと思います。今日はありがとうございました。

## 注

- 1) 『ユーフォ』の舞台となる高校の名称。
- 2) 京都文教大学に存在した地域連携学生プロジェクト「響け! 元気に応援プロジェクト」のこと。
- 3) サブカルチャー吹奏楽の意。アニメやゲームの音楽を演奏する目的で結成されている。多くの場合、ゲーム音楽など、特定の音楽ジャンルを演奏することを目的にメンバーが集まっていることが特徴として挙げられる。
- 4) 風の効果音を出す打楽器の一種。
- 5) 作品名と同じ名前の楽曲。ユーフォニウムの独奏をはじめ複数のアレンジがある。
- 6) アニメなどの作品の舞台となった場所・地域について情報発信を行っている人びとの集まりである「舞台探訪者コミュニティ」の略称。いるか、夷、片山はメンバーである。
- 7) アニメで描かれた風景とほぼ同じ風景探し出すこと。
- 8) 放映されたアニメや発表されたコミックの舞台となった場所を誰よりも早く探し出すこと。
- 9) 正式名称は「オケ専♪」。合唱やオーケストラなど多様な合奏形態の演奏会や団体の情報が集められている。団体が拠点にしている地域や合奏形態によって検索することが可能である。
- 10) 『劇場版 響け! ユーフォニウム〜誓いのフィナーレ』のこと。
- 11) 北宇治OBの演奏会「響け! ファンコンサート」の略称。
- 12) 作中に登場するマーチングのイベント「サンライズフェスタ」の略称。
- 13) BANDはグループ内での円滑な情報共有のためのアプリ。
- 14) 北宇治高校OB吹奏楽団のメンバー内有志で、『ユーフォ』に登場するお菓子や食べ物を実際に調理して再現しようとする活動のこと。楽団とは別組織。
- 15) 同人誌即売会の会場内にある『ユーフォ』のスペースが集まっているところ。
- 16) 2024年4月から放送予定のTVシリーズ『響け! ユーフォニウム3』(NHK Eテレ)のこと。
- 17) JR宇治駅に近接した商店街。平等院をはじめとする観光地へと向かう多くの観光客が利用し、「わんさかフェスタ」などイベントも定期的開催される。

